馬買衆、振駒御役人と盛岡藩の御飯屋、仙台藩の外人屋、馬見所について

OKARI-YA OF MORIOKA-HAN AND GAIJIN-YA, BAKEN-SHO OF SENDAI-HAN
DURING EDO-ERA IN RELATION TO GOVERNMENTAL HORSE TRADE

岡田 悟*, 飯淵康一**, 永井康雄***

Satoru OKADA, Kouichi IIBUCHI and Yasuo NAGAI

Government officials were sent to inspect and purchase horses in Edo-era. Morioka-Han and Sendai-Han were famous for breeding horses.

Through the examination of historical materials, following results are ascertained;

- (1) Officials sent by central government to Morioka-Han used Okari-ya of Morioka-Han as a lodging.
- (2) Officials sent by Morioka-Han to Tono used Okari-ya of Tono as a lodging.
- (3) We suppose that officials sent by central government to Sendai-Han used Gaijin-ya and Baken-sho of Sendai-Han.
- (4) Baken-sho of Sendai-Han was suitable for inspecting horses on front road.

Keywords: Okari-ya, Gaijin-ya, Baken-sho, Morioka-Han, Sendai-Han

御飯屋、外人屋、馬見所、盛岡藩、仙台藩

1. はじめに

仙台藩においては、他藩大名、幕吏等の藩外の人を外人と呼び、こうした人々の宿泊用の施設として外人屋が設けられた。その内の仙台北下の外人屋について、平面構成、利用状況等の変遷を明らかにし、他藩の例と比較しながらその歴史的な性格を検討した^{*1)}。また、仙台藩内には藩主やその一族が宿泊に利用する施設として御飯屋が設けられ、すでに若干の例を検討した^{*2)}。盛岡藩においては御飯屋の存在は認められるが外人屋の名称は用いられず、仙台藩における外人屋を含めて御飯屋と称していた。

一方、藩政期において、馬は産業上、軍事上重要な資源であり、日本各地で馬産がなされた。中でも東北地方は主要な馬産地であり、盛岡藩、仙台藩、秋田藩、相馬中村藩等では馬市が賑わっていた。また、幕府も東北諸藩に馬買衆（公儀馬買衆、御馬買とも呼ばれる）を派遣して馬を調達した。さらに、幕府による馬買制度を相似縮小する形で、盛岡藩は振駒という制度を設け、振駒御役人を領内に派遣して馬を調達していた。

しかし、馬買衆、振駒御役人が滞在、宿泊に利用した施設についての研究は、上記の外人屋、御飯屋が利用されたか否かの解明を含めて、未だ行われていない。また、仙台北下には馬見所と呼ばれる施設も見られるが、馬の調達が実際に行われた建物や場所、さらに

は、これらと町の構成や景観との関連についての検討もなされていない。本稿では、まず盛岡藩を対象に馬買衆と牽石、盛岡の施設について、次に、振駒御役人と遠野の施設について、そして、仙台藩を対象に馬買衆と仙台、川崎の施設について、上記の点から検討したい。こうした検討を加えることにより、従来から進めていた大名、巡見使等の利用に着目した研究をより総合的なものとするのが可能となろう。

2. 馬買衆、振駒御役人、盛岡藩、仙台藩の概要

幕府が東北諸藩に毎年馬買衆を派遣するようになった時期については、寛永7年（1630）もしくは寛永12年（1635）とする説がある^{*3)}。盛岡藩の編年体の史料である『南部藩家老席日誌』（文献1、以後『日誌』と略称）には、日誌の最初の年である寛永21年（1644）以降元禄3年（1690）まで毎年馬買衆派遣の記事が見られるので、遅くとも寛永年間末期には馬買衆派遣は定着していたと考えられる。元禄4年（1691）には老中から盛岡、仙台北下の江戸留守居役に対し「当年より奥州筋江御馬買御下不被遊候間、自分役人申付御馬買時分に通吟味仕調上候様被仰渡」（『日誌』同年4月14日条）とあり、馬買衆の派遣が廃止され、両藩が調達して江戸に送る方法に変更されたことが知られる。このことは『日誌』にお

* 共立女子短期大学生生活科学科 教授・工博

** 東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻 教授・工博

*** 東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻
助教授・博士(工学)Prof., Dept. of the Science of Living, Kyoritsu Women's Junior College, Dr. Eng.
Prof., Dept. of Architecture, Urban Planning and Building Engineering, Graduate School of Engineering, Tohoku Univ., Dr. Eng.
Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Urban Planning and Building Engineering, Graduate School of Engineering, Tohoku Univ., Dr. Eng.

いて馬買衆派遣の記事が元禄3年を最後に見られなくなる事、および、『雫石歳代日記』の元禄4年の記事（文献14、p.33）に「此年御馬買衆下り不被成候」とあることと符合する。

馬買衆は通常2名で^{*4)}、9月から11月にかけて、江戸から奥州街道を下り仙台藩領に入り、笹谷街道を通過して山形藩に抜け、最上地方を訪れた後、秋田藩から秋田街道を通過して盛岡藩に入り、奥州街道を南下し仙台藩を通過して江戸へ戻るのを慣例とした（図1）。天和3年（1683）の例では馬買衆1名に付き一行は35名前後であった（『日誌』同年10月17日条）。

盛岡藩では、盛岡の南部氏居城の他、花巻に抱城、藩内5個所に要害屋敷があり^{*5)}、それぞれを中心として小域下町が形成されていた。遠野には要害屋敷があり、これを拝領していた八戸弥六郎は、高知と呼ばれる門閥的な重臣約30家の筆頭で、1万2千石余の知行高であった。一方、これと併行して、藩内を33の通に分け、各通の中心集落に代官所を置いて統治していた。雫石には33通の一つである雫石通を管轄する代官所が置かれ、馬買衆の経路でもあった秋田街道上に位置していた（図1）。

撤駒については、『日誌』には毎年のように記事が見られ、いずれの年も7月に「所々撤駒申付覚」（元禄5年7月16日条）、「在々撤駒被仰付覚」（元禄10年7月28日条）等と題して、遠野、閉伊、鹿角等の藩内各地へ藩から派遣される役人の名前が記されている^{*6)}。後に述べるように「遠野古事記」に「盛岡より毎年撤駒御役人御出の時」とあることを考え併せれば、定例化されていた様子がうかがえる。

仙台藩の出来事を編年体で記録した『伊達治家記録』（文献2、以後『治家記録』と略称）にも、藩内を馬買衆が通過した記事が見られるが、『日誌』には馬買衆が派遣されていた期間は毎年記事が見られ、しかも以下に述べるように詳細に記されているのに対し、『治家記録』では馬買衆派遣の記事が見られない年があり、馬買衆に関する内容も『日誌』に比して極めて簡略である。

仙台藩では御一門、御一家、準御一家、御一族、着座、太刀上、召出等の格式を持つ門閥的な有力家臣に領地と居館とを与え、居館を中心とした小域下町とその周辺地域を一元的に支配させる体制を採っていた。これら家臣は領地の城、要害、所と称する館^{*7)}と、仙台北城下の屋敷とを共に持っていた。本稿で採り上げる川崎は、馬買衆が派遣されていた元禄末期まで砂金氏（太刀上、1565石）が要害を拝領する在郷小域下町であり、馬買衆の経路でもあった笹谷街道上に位置していた（図1）。

3. 馬買衆と盛岡藩雫石の御仮屋

雫石の現状略図を図2に示した。現在も旧秋田街道の両側に街並が形成され、雫石代官所が設けられた場所が判明している^{*8)}。

寛永21年（1644）には秋山弥左衛門、黒沢木工の馬買衆2名が秋田藩の生保内（図1）から雫石に来て宿泊した。この時「御馳走」のため南部藩士が派遣されていた^{*9)}。天和元年（1681）11月19日には雫石で火災があり、この様子が『日誌』同年11月20日条に

「雫石御町清次郎と申者火元ニ而昨夜四ツ時火事出来、西方御仮屋右清次郎預居申候所ニ御仮屋半分焼失、同軒並新介徳兵衛武軒、向東方御仮屋近所小五郎三九郎ノ武軒ノ家数五軒焼亡仕」

と記されている。これによれば、この時点以前にすでに西方御仮屋、東方御仮屋の御仮屋2軒が存在し、西方御仮屋が半焼したことが知られる。また、清次郎、新介、徳兵衛、小五郎、三九郎の5軒が「焼亡」つまり全焼したことになるが、清次郎は西方御仮屋を預かっていたとあり、清次郎、西方御仮屋、新介、徳兵衛は「軒並」、つまり街道に面して同一の側にあり、小五郎、三九郎は街道の向かい側で東方御仮屋の「近所」であったことが理解される。従って、両御仮屋は街道の両側に、比較的近接して建てられていたと推測される。翌天和2年秋には半焼した西方御仮屋も使用できる状態に復していたことがうかがえ^{*10)}、翌天和3年についても御仮屋を利用したことが記されている^{*11)}。

一方、馬買衆派遣が廃止された直後の元禄4年（1691）には「先歳御馬買様御下り被遊候ニ付、雫石御町ニ而御宿之覚」と題して

「一 下之御仮屋 仁助

右御仮屋之場所ハ、生内与五右衛門殿長屋迄、先年之御仮屋ニて御座候、但与五右衛門殿之通、道下より仁助方之御仮屋之場所ニ御座候

一 上之御仮屋 作右衛門

但し只今帳書居申所ハ、先年家主有之所ニ、天和二年に火事まいり、其より身代成りかね、居不申ニ付、御前様より御仮屋並ニ御入力ニて、諸事繕等被仰付候、御馬買様ニハ元禄四年より御下り不被遊候得ハ破損繕之儀ハ御前より御入力ニて御座候間、為覚留書如是御座候以上」^{*12)}

と記されている。天和2年に上之御仮屋が火事に遭ったというこの記述は、先に述べた天和元年の西方御仮屋半焼という『日誌』記事と、1年の違いがあるものの、同一のことを示すと考えられるので、上之御仮屋が西方御仮屋に、下之御仮屋が東方御仮屋に該当しよう。

上之御仮屋について、「御前（様）より」という表現は藩の費用でという意味と考えられ、それまで御仮屋の修繕等が藩の費用で行われてきたことをこの文書で確認して、馬買衆派遣廃止後も引き続き同様の援助を得ようとしたものと思われる。「只今帳書居申所」は「先年家主有之所」と同一であることが記されるが、その場所と御仮屋の場所との関係、および、帳書^{*13)}と作右衛門との関係は明確でない。しかし、天和元年（1681）の火災の記事に西方、つまり、上之御仮屋を清次郎が預かっていたと記され、両者が街道の同

図1 盛岡藩仙台藩、馬買衆経路 略図

一側に近接して存在していたと推定されたことから、先年家主が清次郎で、帳書が作右衛門であり、元禄4年時点では作右衛門が御飯屋の維持管理を担当し、その屋敷は上之御飯屋と街道の同一側で近接した位置にあったと読むことができる^{*14)}。

ここに名前が挙げられている仁助、作右衛門、生内与五右衛門の内、作右衛門の名は、この文書が記された元禄4年(1691)の約40年後に当たる享保15年(1730)の街並絵図^{*15)}で永昌寺(図2)の東隣の敷地に書き入れられている。従って、両史料に書かれる作右衛門の屋敷地が同一であるとすれば、街道南西側のこの近辺に西方御飯屋があり、道を挟んだ北東側のこれと比較的近い位置に東方御飯屋があったことになる^{*16)}。

この街道を定期的に参勤交代に利用する大名は存在しなかったこと、および、馬買衆が派遣されなくなった元禄4年(1691)以降は御飯屋についての記述が史料に見出せないことを考え併せると、御飯屋2軒は馬買衆2名の利用を最も考慮して設けられていたと考えられる^{*17)}。

4. 馬買衆と盛岡城下の御飯屋

城と奥州街道を中心に、盛岡城下の一部を図3左に略図で描いた。盛岡城は本丸、中丸、新丸からなり、北東が大手となる。城の北東側の堀に囲まれた鍵型の一画は内丸と呼ばれ、門閥的な重臣である高知の屋敷が設けられていた。奥州街道は仙台方面から石町、六日町、上之橋等を通り、城を廻る形に走っていた。

現在遺されている盛岡城下絵図の内、元文年間(1726～40)の図^{*18)}には、奥州街道上の六日町が馬町と交差する位置に「御飯屋地」と書き込まれた2箇所の敷地が描かれ、この部分を図3右に示した。寛永の図ではこの位置に御飯屋は描かれず、図3右に示した2敷地の内、六日町通り北側の敷地は幕末の絵図^{*19)}にも御飯屋と書き込まれている。

天和3年(1683)に雫石御飯屋に宿泊した馬買衆は、翌日「右御兩人今朝卯ノ刻雫石御立盛岡御飯屋へ巳ノ上刻御着」(『日誌』同年10月18日条)とあるように、盛岡御飯屋へ到着したことが知られる。馬買衆は盛岡に2週間程度滞在し、その間に「老番見」「二番見」「三番見」等と称する馬見を数回実施して馬を調達するのを慣例とした。また、馬買衆が登城して藩主もしくは藩主嗣子に面し^{*20)}、藩主や嗣子も御飯屋に馬買衆を訪問するのを慣例とし、天和2年(1682)の例では「若殿様(＝嗣子)御馬買衆江為御見廻末ノ下刻馬町御飯屋江御出」(同、同年10月18日条)とある。ここでは馬町御飯屋と記されるが、以下に挙げる六日町御飯屋、また、次章に挙げる東之御飯屋の名称も『日誌』に見られる。

巡見使も御飯屋を利用した。宝永7年(1710)に巡見使3名が派遣され、「右御三人様御飯屋御着被成」(『日誌』同年7月26日条)とある。この時盛岡藩士3名が「六日町三御飯屋奉行」を首尾よく勤めたことが記されている^{*21)}。また、馬買衆、巡見使が利用した折には盛岡藩から馳走人や料理人が御飯屋に遣わされた^{*22)}。

5. 買馬、御用馬と盛岡城下の御飯屋

馬買衆による馬見の様子は「御馬買衆一番見之内八拾疋御覧、馬場へ八戸弥六郎出ル」(『日誌』天和2年10月17日条)等と記されるが、馬買衆派遣廃止後の宝永7年(1710)にも「公義御買馬老

番見御新丸於表御門見分、御馬場へ御用人松岡藤右衛門……」(同、同年9月12日条)とあって続けて町奉行等の武士の名前が挙げられ、この年も「三番見」まで行っている。このことは、馬買衆派遣廃止後も馬買衆派遣時と同様の馬見が行われていたことを示している。さらに詳細に見ると、元禄3年以前については、ここに挙げた天和2年の例のように「御馬買衆一番見」等と記され「馬買衆が見た」という内容に理解されるのに対し、元禄4年以降については宝永7年の記述のように「公義御買馬老番見」等と記され「公義が買い上げる馬を見た」という内容に理解される。馬場に出た人物も、元禄3年以前については、高知筆頭で遠野に要害を拝領していた八戸弥六郎のような、幕府から派遣される馬買衆への対応に相応しい重臣であったのに対し、元禄4年以降については用人、町奉行と言った実務的な役人に変化したと理解される。

また、上述の宝永7年の例では、実際に馬見が行われた場所として、「御新丸於表御門」とある。元禄12年(1699)についても同様に「公儀御買馬如例年之今日於御新丸御門前二見分申付」とある(『日誌』同年9月10日条)ことから、新丸表門前で行われる例が多かったのではないかと推定される。元禄、宝永年間よりやや後の時代になるが、明和3年(1766)の盛岡城図^{*23)}に描かれる新丸の表御門と御末御門、城大手に位置する総御門周辺を図3上に示した。新丸敷地北辺に設けられた表御門前から総御門前にかけては、「芝原」とある一画を含む広場状になり、広場の北辺には「大腰掛」も備えられ、馬見等の行事に適した空間と言えよう。

馬見の後、買い上げた馬について、元禄3年以前には『日誌』に記述が見られず、これは馬買衆の管理下の馬となって盛岡藩は関与しなかったためと考えられる。元禄4年以降になると「公義江被召上候御馬六日町御飯屋江入候」(『日誌』元禄12年11月24日条)、「御馬七疋今日巳ノ刻御飯屋に相立」(同27日条)とあり、藩は御飯屋で馬を管理し、馬が江戸へ向けて盛岡を出発した後も「御馬ニ附登候御役人之覚」(同、元禄10年11月21日条)とあるように、藩の役人が付いていた^{*24)}。

享保5年(1720)には「御買馬之儀、向後御用御馬と唱可申」(同、同年9月26日条)とあり、享保5、6年の『日誌』には「御用馬(中略)東之御飯屋江入候」(同、享保6年10月24日条)とあるように御用馬の語が用いられている。「御買馬」、もしくは、「御用馬」と称して幕府用の馬を検分、調達、移動するこうした方式は元禄4年以降続いたが、享保6年を最後に『日誌』には見られなくなり、この年を以て廃止されたと考えられる^{*25)}。

6. 御用役人と盛岡藩遠野の御飯屋

元禄年間末期の遠野城下を描いた「遠野御城下丁割図」^{*26)}の内、要害屋敷大手から北側の町場へかけての部分を図4に示した。図中に2軒の御飯屋が描かれているが、遠野の御飯屋について、宝暦13年(1763)に書かれた「遠野古事記」(文献3)には

「公儀より諸国へ御巡検使御廻し被成候始は寛永十年也、其時より遠野へも御出の由、此時の事にも候哉、一日市町より大手之入口の左右に御旅宿の御飯屋二軒被建置候、御用地に町屋敷裏御取上、屋敷主共えは石倉丁裏の畑無役の代地を被下候、此外一軒の御飯屋には一日市町又助家此屋敷に當時は作右衛門と云者居御借上被成、此以後も御巡検御出の節は毎度御借上可被成候」

とあり、御仮屋（＝御假屋）は寛永 10 年（1633）の初の巡見使（＝巡検使）派遣を契機に建設されたと推測されている^{*27)}。これによれば御仮屋は計 3 軒で、2 軒は「御用地」として「御取上」げた敷地に設けた施設であり、他の 1 軒は巡見使来訪時にのみ「御借上」になる臨時的な施設であったとされ、3 名で構成される巡見使の宿泊に対応している。御用地として取上げた敷地に設けられた御仮屋については「一日市町より大手之入口の左右」とあるが、これは図 4 に描かれる 2 軒の御仮屋の位置と一致する。「遠野古事記」には続いて

「寛文七年、延宝九年の御巡検衆も遠野へ御出被成候得共、宝永七年より以来御出不被成候故、東方の御假屋は御破、西方斗被残置候」とあり、巡見使が遠野を通過しなくなったのを契機として、宝永 7 年（1710）以降に東の御仮屋が廃止されたことが知られる。

遠野の御仮屋と撤駒御役人との関係について「遠野古事記」には「盛岡より毎年撤駒御役人御出の時は、前々より西方御假屋を御旅宿に被成、撤場は十文字町の前後を違い簾垣にて囲ひ、御假屋続きの町屋に盛岡御役人、此方御町奉行、御代官、御馬方列席詰居候様に被成置」

と記され、盛岡から派遣される撤駒御役人の宿泊に西の御仮屋が利用されたことが知られる。御仮屋続きの町屋に諸役人が列席したと記されていることから、撤駒御役人は十文字町、即ち、御仮屋があった一日市町と大手筋との交差点を中心とする区域を垣で囲った「撤場」の馬を御仮屋続きの町屋内から見て、調達した様子が推測される。

この後、遠野の御仮屋については、「遠野古事記」に「前々より会所屋は無之、御詮議の科人は御町奉行宅、重キ御詮議者は一日市町西御假屋にて拷問をも仕来候處に、正徳年中一日市町の屋敷裏を御用地に御取上地代金被下、新規に会所屋被建置候」とあり、正徳年間（1711 ～ 15）に、それまで西御仮屋が科人詮議と馬買衆の利用との両機能を共に果たしていた状態から、前者の機能が新たに設けた会所屋へ移されたことが記されている。

会所屋新設の理由として、「遠野古事記」には続いて「両御假屋は公儀御巡検衆並盛岡より上使衆當地へ御出の節御馳走の御旅宿に被建置候、御屋鉢え縄下の罪人を引入レ拷問被仰付、御屋敷を穢し候所へ御請待は上々様え御不敬の御失礼」

と記され、休泊が御仮屋の第 1 の機能であったことが知られる^{*28)}。

その後、享保年間（1716 ～ 35）のこととして「遠野古事記」に「諸村より牽来る馬を一日市町へ集置候故、他領他郷より往来人の妨にも成候故、享保年中裏町検断屋敷の内下の方御借上、馬御役人の御旅宿被建置、撤場惣馬改共に裏町へ御移し、十文字の御假屋は御拂被成候」

とあり、一日市町より外側にある裏町（図 4）の検断屋敷の一部を借上げてそこに馬役人の宿泊施設を建て、撤場も裏町に移し、一日市町にあった御仮屋は撤去されたことが分る。移転の理由として一日市町の混雑を挙げているが、正徳年間に会所屋が新設されたことも理由の 1 つであったと考えられる。裏町に設けられた施設も引き続き御仮屋と呼ばれた^{*29)}が、一日市町にあった御仮屋が「御用地」として「御取上」げる方式であったのに対し、町場の土地を借り上げる方式に改められたこと、そして、一日市町から裏手へ移動していること等の変化が見られる。

7. 馬買衆と仙台北下の外人屋、馬見所

仙台北下を描いた絵図の内、延宝 6 ～ 8 年（1678 ～ 1680）の仙台北下大絵図（文献 6 所収）を図 5 に示した^{*30)}。仙台北下大手から東へ延びる大町（図 5 a）と、それに交わる奥州街道沿いの国分町（図 5 b）には、前稿^{*1)}で述べたように外人屋が設けられていた。

仙台北下の外人屋には外人が休泊した場合に対応する馳走役が任じられていた^{*31)}が、『治家記録』正保 4 年（1647）12 月 18 日条に、外人屋馳走役黒沢久兵衛に関して

「黒沢久兵衛ニ采地十九貫五百文ヲ加増……黒沢木工殿親類ニ就テ……且ツ外人屋馳走役ヲ久シク勤ムルノ功ニ依テナリ」

とある。黒沢久兵衛は黒沢木工の親類であるとされ、黒沢木工は馬買衆として寛永 21 年（1644）に宿泊したことを前述したが、承応 2 年（1653）にも馬買衆として仙台北下の川崎を通過している（『治家記録』同年 9 月 28 日条）。

仙台においては延宝 6 年（1678）には伊達将監宅で（同、同年 9 月 19 日条）、同 8 年には伊達安芸宅で馬買衆を饗応している（同、同年 12 月 9 日条）^{*31)}。将監、安芸は有力門閥家臣であり^{*32)}、仙台北下のそれらの屋敷が饗応の場に用いられた。また、天和 3 年（1683）の例では仙台に到着してから 9 日後に仙台を発ったこと（同、同年 11 月 13 日条、22 日条）が、貞享 2 年（1685）、同 4 年には馬買衆が登城していること（同、貞享 2 年 11 月 21 日条、貞享 4 年 10 月 10 日条）が知られる。仙台滞在中の馬買衆の行動についての記事は『治家記録』等の史料に乏しく、馬買衆が馬の調達を行ったか否かは明確でない。しかしながら、これらの記録に見られる馬買衆の仙台滞在期間、登城や饗応の行事等は盛岡におけるのと大きく相違することがないこと、先に述べたように馬買衆の派遣廃止が盛岡、仙台北下の留守居役に申し渡されていること、また、馬買衆の派遣が廃止された後の記録ではあるが、『日誌』享保 5 年（1720）9 月 27 日条に「仙臺南部の御用之御馬例年通候節之覚」として江戸までの道中の厩や飼料についての記事が見られることを考え併せれば、盛岡と同様に馬の調達が行われたと推測される。

馬買衆の派遣が廃止された後の元禄 4 年（1691）以降は、元禄 11 年（1698）に「南部ヨリ公儀御買馬今朝国分町ヲ発ス」（『治家記録』同年 12 月 5 日条）、同 13 年（1700）に「南部ヨリ御買馬国分町ニ着」（同、同年 12 月 4 日条）とあるように買馬が発着したという表現に変化している。元禄 13 年の例では到着の翌日に発っていて、滞在期間も馬買衆の場合に比して短くなっている。『治家記録』ではこの元禄 13 年の例を最後に買馬に関する記事は見られなくなり、この時期は『日誌』から買馬、御用馬の記事が享保 6 年（1721）を最後に見られなくなるのとはほぼ符合する。また、馬買衆、買馬が宿泊、滞在した場所、施設については、この元禄 11 年、13 年の記録に国分町と記される以外は見出せない。

さて、仙台北下作事が建設・修覆を担当した建物の台帳であった『御修覆帳』は、現在 3 冊遺されている。それぞれが使用された期間が下記のように明らかにされ^{*33)}、前稿^{*1)}と同様に、時代順に①②③と番号を付した（①③は宮城県図書館蔵、②は東北大学蔵）。

『御修覆帳①』貞享 3 年（1686）～元禄 7 年（1694）頃
『御修覆帳②』安永年間（1772 ～）初頭～天保 2 年（1831）頃
『御修覆帳③』文化年間（～1817）末から 40 ～ 50 年間
②と③とは使用された期間が一部重複しているのに対し、①と②と

の間には約 80 年の空白期間がある。

外人屋は寛永 10 ～ 18 年（1633 ～ 41）に最初に建てられたと考えられる^{*1)}。①の目次には当初、外人屋として、大町老町目御外人屋、国分町中野太兵衛方御外人屋、国分町相沢平右衛門方御外人屋、国分町堀江八之允方御外人屋、国分町柴田甚左衛門方御外人屋の 5 項目が挙げられ、これらは大町外人屋（図 5 c）、および、国分町（図 5 b）にあった 4 軒の外人屋に相当する。①の目次にはこれら 5 軒とは別に「国分町柴田彦右衛門方御馬御覧所」という項目が見られ、目次での記載順は、大町外人屋から堀江方外人屋までは上に示した順であり、その次に柴田彦右衛門方御馬御覧所があって、最後に柴田甚左衛門方外人屋が挙げられている^{*34)}。柴田彦右衛門方御馬御覧所と標題が書かれた頁には図 6 に示す図が描かれ^{*35)}、その左側に「右御長屋貞享二年ニ御立替」と書き込まれている。貞享 2 年（1685）は①が使用される直前の時期であり、「御立替」とあることから貞享 2 年以前にすでに同様の建物が存在していたことが知られる。

図 6 は桁行 12 間の建物平面図に「門通」の書き込みがあり、左側の書き込み中に「御長屋」とあるように長屋門の形式であるが敷地は描かれず、また、往来との関係、方位も示されていない。門を挟んで、図 6 で右側に 12 畳の広さの部屋が、左側に 8 畳、8 畳、10 畳の広さの 3 室が並び、左端の 10 畳の部屋には床が備えられ、湯殿、閑所が接続し、中央の 8 畳の部屋に接する 8 畳の部屋には水屋、玄関が付せられている。原図には間仕切り、建具等が書き込まれ、図 6 にもそれらを示したが、左側 3 室の、図で上側の間仕切りはすべて「シトミ」（＝葎）で開放的であり、その外側にくれ縁が設けられ、書き込みよりくれ縁の端に「かうらん」（＝高欄）、「ふみたん」（＝踏み段）が取り付けられていたことが知られる。そして、この敷地が国分町にあって建物が長屋門形式であることから、図でこの建物の上側が奥州街道に面していたと考えられ、くれ縁は街道に面する側に設けられていたことになる。御馬御覧所という標題が示唆する機能とこの平面とを考え併せると、床のある 10 畳の部屋とそれに続く 2 室の葎を開け、くれ縁から高欄越しに街道上の馬を見て、さらには踏み段から街道上に降りることができるように設計されていたと考えられる。

②には目次に「国分町外人屋并同所御立除屋鋪／同町元御馬見所」（／は改行）という項目があり^{*36)}、外人屋とその後方の立除屋敷とを描いた頁と、国分町元御馬見所と題された頁との 2 枚があり、後者を図 7 に描いた^{*37)}。桁行 11 間の長屋門形式の建物平面図が描かれ、これとは別に「外人屋守 皆川齊兵衛 自分家」と書き込まれた建物の外郭線が描かれている。前者は黄色く着色され後者は着色されていない。『御修覆帳②』に表現される外人屋の例からは着色されたもののみが藩作事方の管轄下にあると考えられ³⁸⁾、後者は「自分家」と書き込まれることから、自力で建設、管理する建物であったと判断される。皆川齊兵衛については不詳であり、また、「外人屋守」とあるが、外人屋との具体的な関係も不明である。

図 7 に描かれる長屋門には、2 カ所の「二階口」があり、2 階建てであった。図 6 と同様に建具類も書き込まれ、部屋の奥州街道に面する部分はすべて板戸とされる。また、「懸下」とある部分が街道側全面に付せられているが、これは庇の下、あるいは、2 階出桁の下を示すと推定され、図 6 の「長小羽かけ下」とされる部分に共

通する。敷地内側に板前、土間を含む部分が突出する形に描かれ、竈も描かれていることから、ここは台所に相当しよう。また、図 6 と同様に湯殿が設けられている。

③には目次に「国分町外人屋并同所御立除屋敷／同町元外人屋」（／は改行）という項目があり、②と同様、外人屋と御立除屋敷とを描いた頁と国分町元外人屋と題された頁とがあり、後者を図 8 に描いた。敷地と「外人屋守 自分家」とが描かれ、これらは明らかに図 7 と同じものである。外人屋守自分家が着色されていないことも図 7 に共通するが、他に建物は描かれていない。②③いずれにも方位等の書き込みはなく、国分町のどちら側に位置していたかは不明であり、また、具体的に敷地を特定する史料も見出せない。

以上を基に、まず、①（図 6）と②（図 7）とを比較すると、長屋門形式の建物である点が共通し、台所部分、床の有無等の点で相違するものの、街道に対して開放的な平面を持ち、湯殿を設ける点も共通する。①の建物桁行 12 間は②の建物桁行 11 間とその脇（図 7 で上側）の空き 1 間を加えたものに等しい。また、①の標題「御馬御覧所」と、②の標題「元御馬見所」とは、名称の点で継続性が認められる（以降、御馬見所と御馬御覧所とをまとめて馬見所と表記する）。従って、図 6 が建てられていた敷地は②に描かれる図 7 敷地と同一で、①から②へかけての期間に図 6 から図 7 へと建替えられた可能性が指摘できる。また、①②両建物は『御修覆帳』に載せられていることから、藩作事方が担当した建物であったことが知られ、両者の標題からは、①の時代にはこの建物で馬を見るという機能が果たされていたのに対し、②では「元」と冠せられていることから、それが過去の機能であったことがうかがえる。

次いで、②（図 7）と③（図 8）とを比較すると、①②に継続して描かれていた長屋門形式の建物は③には描かれていない^{*39)}。馬見所としての機能が①から②へかけての間に失われたとすれば、それを受けて建物そのものも取り壊されたと考えられる。また、標題に「元外人屋」とあるが、これは②の標題「元御馬見所」とは直接の関連がなく、この敷地を外人屋とした史料も見出せない。

ところで、他の馬見所の例を見ると、大名の居館や屋敷で馬場に面して馬場を眺めるのに適した建物にこの名が見られ、馬場に沿って細長い形状をしているものが多い^{*40)}。仙台での図 6、7 の場合は、国分町の通りが馬場に相当する。仙台では毎年 3 ～ 4 月に大町と国分町が交差する芭蕉の辻（図 5）を中心に国分町で馬市が開かれた。その様子は日本各地の名産品に関わる生産、技術の様子を描いた『日本山海名所図会』（文獻 9）にも見られる。また、盛岡や遠野では買馬や撤駒の馬見の場所を大手筋に設けていたが、仙台でも大手筋である大町、国分町周辺がこの場所に相当しよう。

実際ここで誰が馬を見たかを具体的に示す史料は見出せないが、この馬市を仙台藩主が見た、あるいは、馬買衆が調達のため馬を見た可能性が考えられる。しかし、仮に前者とした場合、藩主の行動を詳細に記録している『治家記録』にこうした記事は全く見られない。

一方、後者とした場合、『御修覆帳』の頁の標題から、馬見所の機能が失われたと推測される時期は①を使い終えた元禄 7 年（1694）から②を使い始めた安永年間（1772 ～）初頭までの間と考えられ、この時期は元禄 4 年（1691）以降の馬買衆派遣廃止や享保 6 年（1721）以降の盛岡藩による買馬廃止と時期的に符合する。馬見所と馬買衆とを直接結びつける史料は見出せないが、まず、馬

見所と外人屋との関係を見ると、『御修覆帳』の目次に両者をひとまとめにした配列や項目が見られること、馬見所を描いた頁に外人屋の語が見られること、共に国分町にあったこと、等から、馬見所は外人屋に非常に近い性格の施設と認識されていたと考えられ、馬見所が廃止されてからかなり後の時代の『御修覆帳③』には、こうした背景のもとに、元馬見所とすべきところを元外人屋と表記した可能性が高い。次に、外人屋と馬買衆との関係を見ると、馬買衆は幕吏で外人に相当すること、前述のように外人屋馳走役に馬買衆の親類を任じる等の配慮をしていること等から、両者の密接な関係がうかがえる。従って、馬見所と外人屋との関係、および、外人屋と馬買衆との関係から、馬見所と馬買衆との関係が強く示唆され、馬見所は藩主の利用よりも馬買衆の利用を考慮した施設と考えられよう。盛岡での馬買衆、遠野での撤駒御役人の例では、御飯屋に宿泊し、新丸表門前や御飯屋続きの町屋で馬見をしていたが、これと同様であったとすれば、仙台においては馬買衆は外人屋に宿泊し馬見所で馬を見たことが予想される。

①②に描かれる馬見所は、ほぼ敷地間口いっぱいに建てられた長屋門形式であること、および、街道側に広く開放されることを特徴とする。前者は、①に描かれる国分町中野太兵衛方の外人屋、および、その北側に隣接する検断中野太兵衛敷地では敷地間口いっぱいに長屋門が建てられていたこと^{*1)}と共通性が認められ、後者は遠野において町屋に諸役人が列席して馬を見るような形式に共通する。また、②③に描かれる国分町外人屋の長屋門部分を図9、図10に描いた^{*41)}。共に敷地間口いっぱいに建てられた長屋門で、図10には国分町を行進する東照宮祭礼の行列を藩主が見るために用いたと考えられる「御覧所」という部屋が描かれ^{*1)}、図9ではこれらの部屋の街道に面する部分全面に板戸と書き込まれ、長屋門から街道上の行事を眺めるのに適した設計がされているが、こうした点は馬見所平面に共通する。このような用法、設計は、門を閉めれば敷地外に向かって閉鎖的な構えとなる武士住宅や民家の長屋門^{*42)}と大きく異なり、また、他藩の外人屋に類する施設と比較しても、例えば、毛利藩の萩城下の御客屋では敷地と街道の境界に塀が立てられ1カ所に門が設けられていた^{*43)}のと大きく異なっている。

8. 馬買衆と仙台藩川崎の外人屋

白石(図1)では御一家の片倉小十郎が白石城を拝領し1万8千石を知行していた^{*7)}。江戸を発ち仙台藩内に入った馬買衆は元禄元年(1688)9月28日に「白石屋休所ニ着ニ因テ、如例片倉小十郎馬買衆旅館へ参候、饗応ス」(『治家記録』同年10月2日条)とあるように白石で昼食をとり、その折に片倉氏が饗応するのを常としていた。饗応の場所として挙げられる「旅館」に関する具体的な記述は見られないが、盛岡藩主、松前藩主等の参勤路である奥州街道の宿駅でもあった白石にはこれらの大名等が休泊に利用する施設があり^{*44)}、これを利用したものと考えられる。帰路に馬買衆が宿泊した記録(『治家記録』元禄元年11月22日条)が見られる岩沼(図1)においても同様である^{*45)}。

白石で昼食の後は川崎(図1)に宿泊するのを慣例とした。川崎を通る笹谷街道は七ヶ宿街道(図1)と共に出羽地方の大名の参勤交代路として利用され川崎に大名が休泊した記録が見られる^{*46)}。

上述の元禄元年(1688)9月28日の場合は、続いて『治家記

録』に、「晩川崎驛ニ一宿、前日ヨリ大越十左衛門彼地へ参シ饗応之」とあり、仙台藩主が使者を派遣して馬買衆を饗応した。こうした饗応については他の年の記録にも見られ、盛岡藩の筆石におけるのと同様であったが、宿泊や饗応に利用した施設を具体的に記した史料は見出せない。唯一、川崎におけるこうした施設に関する記録は、『治家記録』元禄7年(1694)3月25日条の「伊達上野殿へ水澤外人屋ヲ賜ヒ、本多伊賀ニ川崎外人屋ヲ賜ヒ、真山三次郎ニ中新田外人屋ヲ賜フ」に示される川崎外人屋についてのものである。ここに挙げられる3箇所の内、水澤(図1)は奥州街道の宿駅であり、元禄7年以前に外人屋が2軒設けられていた^{*47)}が、これが水澤を拝領する伊達上野^{*32)}へ払い下げられたと記されている。また、中新田(図1)の外人屋は、万治2年(1659)から延宝2年(1674)まで幕府から仙台藩へ派遣された目付衆^{*48)}のために万治2年に建てられ^{*49)}、これが元禄7年時点で中新田を拝領していた真山氏に払い下げられたと記されている。川崎の場合は川崎を拝領する砂金氏ではなく、貞享4年(1687)に、川崎の南東約8kmにある柴田郡足立邑に在所を拝領した(文献7)本多伊賀(召出、1800石)に払い下げられ、状況が異なっている^{*50)}。

仙台北城下の大町外人屋の払い下げの原因の1つに幕府からの上使の派遣がなくなったことが挙げられ^{*1)}、中新田の場合も目付の派遣が終了したことが理由として考えられるが、川崎においても馬買衆の派遣が元禄3年(1690)を最後に廃止された直後に払い下げられている。従って、外人屋の位置^{*51)}や他の施設との関係が明確でないものの、川崎外人屋は盛岡藩筆石と同様に馬買衆の宿泊利用のために設けられたもので、仙台から派遣された藩士による饗応もここで行われたのではないかと推測される。

9. 結び

盛岡藩の御飯屋、仙台藩の外人屋、馬見所と関連して、馬買衆、撤駒御役人が宿泊に利用した施設、馬見を行った場所・施設、および、これら施設の建築について検討してきたが、その結果、以下の点が指摘できる。

〔1〕馬買衆は筆石、盛岡の御飯屋を、撤駒御役人は遠野の御飯屋を宿泊に利用した。馬買衆が元禄4年以降廃止されたことを考え併せると、その直後の元禄7年に払い下げられた川崎の外人屋も筆石の御飯屋同様に馬買衆の宿泊に利用されたと考えられる。このように、御飯屋、外人屋と馬買衆との密接な関係がうかがえる。

〔2〕馬を実際に見て調達する場所は、城や要害屋敷の大手筋、あるいは、それと城下を通過する主要街道とが交差する位置付近に設けられる場合が多い。遠野ではその場所に設けられた御飯屋に続く町屋に撤駒御役人が列席して馬見を行った。仙台では大手筋近くの国分町に馬見所が設けられ、馬買衆が利用したと推定される。

〔3〕仙台的馬見所は、街路側に広く開放される平面計画がなされ、街路上に馬を導いてこれら施設から眺めて調達するのに適していた点が特徴である。馬見所が面していた国分町は街道沿いの町場であり、同じく国分町にあった外人屋と同様に、街路境界線に沿って前面の街道への開放度が高い長屋門を建て、町並と一体化した景観が形成されていたと推測される。

〔謝辞〕本稿をまとめるに当たり、史料・絵図に関して盛岡市中央公

民館、雫石町教育委員会、上野善一氏、宮城県図書館の協力を得た。
付記して謝意を表した。

注

- 岡田悟、飯沼康一、永井康雄「仙台北下の外入屋について」日本建築学会計画系論文 集第 527 号、pp.233～240、2000.1
- 佐藤巧、岡田悟「仙台北下における松島、塩釜の御飯屋について」日本建築学会論文報 告集第 328 号、pp.136～145、1983.6
- 寛永 7 年は文獻 5 p.74 (復刻版) に、寛永 12 年は「雫石年代記」(文獻 15、p.32) による。
- 幕府の馬事行政関係の役職は、若年寄の下に御召馬御預、野馬奉行、御馬預、御馬方、御馬乗、馬醫が設けられていた(文獻19、pp. 6～8)。この内、馬買衆として記録に 見られる中山勘兵衛、黒澤玄之助(黒澤木工と同一か)の名前が万治～延宝年間の武蔵 に御馬預衆として挙げられている。
- 「御居城並抱城要害屋敷御書上之事」(文獻 4 所収)による。これには要害屋敷として 遠野、花輪、毛馬内、七戸、野辺地の 5 箇所が挙げられている。
- 『日誌』明暦 4 年 7 月 9 日条では「セリ駒」、寛文 2 年 7 月 21 日条では「せり駒」 と表記されている。また、文獻 16 では「とりごま」と読んでいる。
- 元和元年の一国一城令によって各藩には大名居城一城のみが許されるのを原則とし たが、仙台北下では大名居城である仙台北の他に白石城が認められ、この他に要害 (要害の 地であり、古館を除屋敷として拝領し、家中屋敷・町場を拝領する)、所(要害の地でなく、 居屋敷を除屋敷として拝領し、家中屋敷・町場を拝領する)が藩内に散在的に配 置されていた。要害、所の数は藩政期を通じて若干の変動があったが、文久年間の「伊 達家世臣図」(文獻 8、p.280～287)には要害 21 箇所、所 28 箇所とされている。
- 現在秋田方面から上野、中野、下町という構成であるが、この町名については文獻 16、p.335 に「これに関わる資料はなにも残っていない」とされている。現在雫石町教 育委員会によって旧代官所の位置を示す案内板が立てられているが、そこは注 12 絵図 に「御役屋御門前通り」と示される横丁の位置に一致する。この表現からは、代官所は 街道に面する敷地ではなく、横丁によって引き込まれた所にある敷地に建てられていた と推定される。
- 『日誌』同年 10 月 24 日条に「秋山弥左衛門殿幸町宿ニ爲御馳走一方井刑部、大釜 彦右衛門両人を指遣す、黒沢木工殿同所同断戸来五左衛門、宮田頼兵衛を遣す」とある。
- 天和 2 年 10 月に中山勘兵衛、加藤勘四郎の馬買衆 2 名が雫石に宿泊した際には「雫 石御馬買衆両御飯屋辻遣置候御道具具覧」(『日誌』同年 10 月 6 日条)とあり「両御飯 屋」と表現されている。
- 「御馬買衆中山勘兵衛様幸石御飯屋へ辰ノ下刻御着、加藤権左衛門様巳ノ刻御着被 遊」(『日誌』天和 3 年 10 月 17 日条)とある。
- 「穀村肝入館市留書」(文獻 15、p.79 所収)。雫石町検断、長山村肝入、上野村肝 入、雫石村肝入の連名で、雫石通代官田代佐野右衛門、太田原清右衛門宛の文書。
- 候書は百姓身分から選出されて代官所で帳付け等を行う役である。
- この史料からは「右(二下之)御飯屋之場所」「先年之御飯屋」「仁助方之御飯屋之 場所」の 3 者の関係は明確にならない。
- 「享保十五年戊七月廿日御蔵給所居屋敷小間割吟味書上帳」個人蔵、文獻 16 所収
- 現在の永昌寺は注 15 絵図と同位置にある。生内与五右衛門は雫石在住の南部藩士で あった(文獻 15、p.79)が、これと仁助の名は注 15 絵図に見出せない。また、御飯屋 遺構、御飯屋の建築形態を具体的に示す資料は共に遺されてなく、以下に述べる盛岡、 遠野においても同様である。。
- この他に巡見使の利用も考慮に入れる必要があるが、寛文 7 年(1667)の場合は雫石 へは巡見使の家老 3 名が来ているだけであり、延宝 8 年(1680)の場合は、盛岡から雫 石へ向かう途中で折り返して雫石へは来ず、宝永 7 年(1710)にも巡見使は急に予定を 変更して雫石には来っていない。
- 盛岡市中央公民館蔵。年代は書き込まれていないが、図中の武士屋敷地に書き入れら れた人名と分限帳等とを対応させて公民館が調査した結果によった。現在の盛岡は図 3 左と比べて、北上川が付け替えられている点が大きく異なるが、城趾、堀、街路形態は 旧状をよく遺し、図 3 左に描かれる上之橋、中之橋、下之橋とほぼ同位置に現在も同名 称の橋がある。
- 弘化 3 年享しの天保盛岡図、および、慶応年間図の城下及近在図(共に盛岡市中央公民 館蔵)。
- 天和 2 年(1682)の例では「御兩人様(＝馬買衆 2 名)申ノ刻御新丸江御見廻、於御 小寺院御対面」(『日誌』同年 10 月 14 日条)とあり、新丸で藩主嗣子と馬買衆とが対 面している。この年は藩主が 3 月 20 日に参勤で江戸へ発ち、盛岡に不在のため嗣子が 代行しているが、藩主が居るときは藩主と対面している。藩主の場合は新丸でなく中丸 で対面するのが普通である。
- 「六日町三御飯屋奉行佐々木惣七、根守治平、米沢源太御巡見御用首尾克相仕廻候」 (『日誌』同年 7 月 29 日条)
- 天和元年(1681)の巡見使の場合は「盛岡御飯屋ニ而馳走人樺山五左衛門、内堀磯部、 此外御料理人御宮仕人、尤御町奉行御勝手ニ結居」(『日誌』同年 9 月 1 日条)とあり、 翌年の馬買衆の場合は「御飯屋ニ而馳走人被付置野田利右衛門、漆戸勘左衛門」(同、 同年 10 月 14 日条)とある。この馳走人は仙台北入屋の場合における外人屋馳走役(注 1)に相当しよう。
- 明和 3 年(1766)の「盛岡城図」(盛岡市中央公民館蔵)。文久 3 年(1863)写しの 「御新丸図」(同蔵)にも同様に表御門が描かれ、また、大腰掛は元分年間の城下図 (注 18)にも描かれている。
- 『日誌』享保 5 年 9 月 26 日条にはこの役人として「物頭目付之内老人、馬役馬買之 内老人、馬醫老人、足軽五六人程、口付中間老疋老人」と記されている。馬買は馬の 調教師の意である(文獻 17 序文)。
- 『日誌』には享保 7 年に藩士を御用馬役に任じた記録が見られるが、馬見の記録は 見られない。享保 8 年以降は、藩によって幕府用馬の調達が中止され、馬喰が直接江戸へ 馬を引き連れて、麻布、浅草等の馬市で幕府が直接調達する方法に変更された(文獻 19、P.554)。
- 個人蔵、文獻 11 所収。年代は文獻 11、p.8 に「図中の諸士名からみると元禄末頃の 実体を示しているものように考えられる」とあるのによる。現在の遠野の要害屋敷趾、 街路形態は旧状をよく遺し図 4 の一日市は通りの名として、鞍町は町名として現存す。
- これは、仙台北において寛永 10 年の巡見使派遣以前には外人屋が設けられていなかっ たと考えられる(注 1)ことと共通する。
- こうした休泊施設で科人詮議が行われていた点は、毛利藩における萩の御客屋(岡田 悟「毛利藩における萩、山口の御客屋について」日本建築学会計画系論文集、第 516 号、 pp.235～241、1999.2)に共通する。
- 鞍町検断佐々木甚右衛門の寛政 8 年(1796)～天保中期の記録である「検断勘方記」 に「馬改之節心得之事」として「三月七月十月老年三度於裏町御飯屋ニ馬改被仰付候」

- 等とある(文獻 18 所収)。馬改は馬の性別、寸法、毛並や等級を決定し、牛馬鞍轡の 改訂を行うもので、盛岡から牛馬目付、牛馬定役が派遣された。
- 前稿(注 1)で寛文 8～9 年(1668～9)の仙台北下絵図と安政 3～6 年(1856～9)の安政補正改革仙府絵図の 2 点に外人屋に関する敷地が描かれている、としたが、 延宝 6～8 年(1678～80)の仙台北下大絵図、寛文 9～11 年(1669～71)の仙台北 下絵図にも寛文 8～9 年の絵図と全く同様に大町外人屋敷地が描かれ、計 4 点に描かれ ていた。また、大町外人屋敷地周辺が延宝絵図と寛文 8～9 年の絵図とでほとんど差が なかったため、延宝絵図である前稿(注 1)図 1 に寛文 8～9 年の絵図のキャプション を誤って付してしまった。本稿上でお詫びし訂正したい。なお、これは、仙台北下の外 入屋が寛永 9～18 年(1632～41)に初めて建設され大町外人屋が元禄 7 年(1694)に 払い下げられた、という前稿(注 1)の論旨に影響を与えるものではない。
 - 『治家記録』延宝 6 年 9 月 19 日条には「今度御馬買仙台北へ着セラル節、伊達将監宅 ニ於テ懇応スヘキ旨最前命セラル」とあり、実際に饗応が行われたかは記されていない。
 - 御一門水沢伊達氏は、水沢要害を拝領し 16130 石を知行し、将監もしくは上野と呼ば れ、同じく御一門涌谷伊達氏は涌谷要害を拝領し 22640 石を知行し、安芸と呼ばれた。
 - 阿部和彦「仙台北下における「御御覆」制について その 1「御御覆帳」年代考」日本 建築学会東北支部研究報告集第 48 号、pp.7～14、1986.10
 - これら 5 軒の外人屋の内、4 軒は元禄 7 年に払い下げられ、国分町の 1 軒のみが幕末 まで藩作事方によって建設、維持管理された(注 1)。また、柴田彦右衛門を含め、こ れらの人名に対応する敷地の位置等を具体的に知り得る史料は見出せない。
 - 柴田彦右衛門と①に描かれる図 6 建物との関係は不詳である。
 - ①では目次の項目と建物とが 1 対 1 に対応して項目に通し番号が付けられていないの に対し、②③では複数の建物をまとめて目次の 1 項目とし項目に通し番号が付けられ、 ②で元禄馬見所を含むものは廿六と、③で元外人屋を含むものは廿五とされている。
 - 図 7、8 では、建物の描かれていない敷地後部を省略したが、敷地奥行きを原因の寸 法を基に算出すると、図 7、図 8 では共に約 24 間となり、前稿(注 1)注 10 に示した 国分町屋敷の標準的な奥行きである 25 間とほぼ一致する。
 - 前稿(注 1)注 18 参照
 - 図 7 の長屋門の下側 2 間半程は図 8 では敷地外となり、図 7 でこの部分に「自分屋」 と書き込まれているが、これと図 7、8 で下隣の敷地との関係は明確でない。
 - 萩御城内並西御長屋共差図(山口県文書館蔵)、酒井家神田橋上屋敷図(文獻 10、 p.130 所収)、伊達家愛宕下上屋敷図(同 p.56 所収)等。なお、「馬見所」の読み方 は、溝口辰一郎「紙上履気」宝暦 8 に「バケンシヨ」とされ、これに倣った。
 - 図 9、10 は前稿(注 1)では敷地全体の一部として載せたが、本稿では長屋門のみ を描いた。前稿では省略した建具類も図 9 に書き入れた。なお、前稿にも記したが、③ には図 10 に示す門が描かれる図と、それに建て替えられる前の、②に載せられる図 9 と同じ平面の門が描かれる図とが共に載せられている。後者には建具類が書き込まれて いるが、その状況は②に載せられる図と若干異なっている。図 9 には②の書き込みを書 き入れた。
 - これらの長屋門については数多くの実例が示されている。また、武士住宅の長屋の成 立、原型、機能については文獻 20 に詳説されている。
 - 岡田悟「毛利藩における萩、山口の御客屋について」(注 28)
 - 岡田悟「仙台北下における奥州街道宿駅集落の武士休泊施設 その 2 白石の本陣」日本 建築学会東北支部研究報告集第 43 号、pp.133～136、1984.3
 - 岡田悟「同 その 1 岩沼の本陣」、同、pp.129～132、1984.3
 - 例えば、『治家記録』元禄 2 年(1689)4 月 2 日条に「去月廿六日山形侍従直矩朝臣 参勤柴田郡川崎駅一宿」とある。こうした際に休泊に利用された施設については「大名 の宿泊した本陣も、少なくとも川崎宿には設けられたものと思われるが、その記録は度 重なる火災などのため散逸して定かでない」(文獻 13、p.107)とされている。
 - 寛永 18 年(1641)の検地帳(文獻 12、p.664)には「外人宿」として立町検断太郎右 衛門と七兵衛の 2 軒が挙げられている。
 - 仙台北下では、万治元年(1658)に 19 才で襲封した 3 代藩主綱宗が万治 3 年 7 月に幕 府から通駕を命じられ、わずか満 1 才の綱宗が 4 代藩主に命じられ、延宝 3 年(1675) に入部するまで江戸で生活する、という事態が生じ、幕府から毎年 2 名ずつの目付衆 が派遣された。この目付衆は仙台北下に滞在しつつ、藩内を巡視して藩政を監督した。 中新田の肝入、検断を勤めた熊谷家の「先祖古記録写」(同家蔵、安永 5 年、1776) 中、19 代 藤右衛門治良の項に、万治 2 年(1659)に「藤右衛門屋敷代七拾六文目目 二被立下、御外人屋被建御外人屋守并御作事方役被仰付、中新田南町肝入検断兼役ニ 被仰付相勤申候」とあり、これに続いて延宝 2 年までに 15 組 30 名の目付衆の宿泊が記 されている。
 - 砂金氏に払い下げられなかった理由は不明であるが、元禄 15 年(1702)に砂金氏は 断絶しており、こうした事情が関係しているかも知れない。
 - 先に挙げた『治家記録』記事の元禄元年の年前に当る貞享 4 年(1687)の「柴田郡前川 村川崎要害屋敷惣絵図」(宮城県図書館蔵)には小城下町が居所、家中屋敷、足軽屋敷、 町屋に分けて描かれているが、敷地割りや敷地ごとの書き込みはされてなく、外人屋、 本陣等の書き込みも見られない。

参考文献

- 『南部藩家老日誌』寛永 21～天保 11、盛岡市中央公民館蔵
- 『伊達治家記録』宮城県図書館蔵
- 宇夫方広隆「遠野古事記」宝暦 13(『南部叢書』第 4 冊、南部叢書刊行会、1927 所収)
- 阿部知義「郷村古事見聞記」元文元年(同上所収)
- 菊池悟朗(発行、編纂)『南部史要』明治 44(熊谷孝による復刻、1998.10)
- 阿刀田令造「仙台北下絵図の研究」東洋書院、1976
- 『伊達世家家譜』(『仙台北下』続刊 2～7 巻、仙台北下研究会、1933～35)
- 清水東四郎『宮城縣通史』宝文堂、1976(昭和 6 年の復刻版)
- 平瀬徹蔵、長谷川光信(画)『日本山海名所図会』宝暦 4、京都大学経済学部図書館 財部文庫蔵
- 佐藤巧「近世武士住宅」叢文社、1979
- 『遠野錦倉城跡』遠野市教育委員会、1961.3
- 『水沢市史 3 近世上』水沢市、1981
- 『川崎町史 通史編』川崎町、1975
- 『雫石町誌史料 第 1 集 雫石蔵代日記』雫石町、1963.3
- 『雫石町誌史料 第 2 集 雫石街道の歴史』雫石町、1967.3
- 『雫石町史』雫石町、1979.1
- 『南部藩御野馬別当御留留』青森県文化財保護協会、1998.3
- 『馬とくらし』遠野市立博物館、1990.3
- 帝国競馬協会(編)『日本馬政史 第 2 巻』原書房、1981.12(昭和 3 年刊の複製)
- 宮崎勝美、吉田伸之『武家屋敷 空間と社会』山川出版社、1994.10
- 山森芳郎、有馬洋太郎、岡村純『日本の馬と人の生活誌』原書房、1993.3

(2002 年 6 月 10 日原稿受理、2002 年 10 月 30 日採用決定)